『猫』に於ける狂気と正気

浅野　晃

一

『吾輩は猫である』のなかに、主人公の苦沙弥先生が、自宅のすぐ裏手にあたる落雲館という名の私立中学の生徒たちに、さんざんいじめられる事件が出てくる。

この事件は一種の陰謀である。苦沙弥家のちかくに金田某という羽振のいい実業家が住んでいて、その夫人を鼻子となづける。彼女が偉大なる鼻を所有しているので、この鼻に敬意を表して、美学者の迷亭がかく仇名したものである。陰謀事件は鼻子の逆鱗からはじまる。

鼻子が苦沙弥家にあらわれたのは、寒月君を娘の婿にということで、寒月が苦沙弥の教え子であったので、苦沙弥の口からこの婿候補の身許や人となりをきき取ろうとしてであった。しかるに彼女が訪れたとき、折悪しく迷亭がそこに来ておった。迷亭は鼻子をからかい、主人の苦沙弥も迷亭に同調して鼻子をからかい、二人にからかわれた鼻子は、柳眉を逆立てて帰ってゆく。そして夫に訴えた。夫の金田君大いに怒り、それなら金持の金の力を思い知らせて

やれというので、落雲館の教師をしているピン助、キシャゴの諸子に旨を含め、生徒を煽動して、苦沙弥に神経戦を挑む。この作戦がまんまと成功して、気の小さい苦沙弥は逆上におちいるのである。

事件のいきさつは原作を想い起していただくこととして、ここでは苦沙弥の大学時代の旧友で、いまは金田某のもとでサラリーを得ている鈴木の藤さんが、金田の指令で苦沙弥の家へ、情勢を偵察に来ての問答を、引いてみる。

「君すこし顔色がわるいやうだぜ、どうかしやせんか」

「別にどこも何ともないさ」

「でも蒼いぜ、用心せんといかんよ。時候がわるいからね。よるは安眠ができるかね」

「うん」

「何か心配でもありやしないか、僕に出来る事なら何でもするぜ。遠慮なくいひたまへ」

「心配って、何を？」

「いえ、なければいいが、もしあればといふことさ。心配がいちばん毒だからな。世の中は笑って面白く暮すのが得だよ」

「笑ふのも毒だからな。むやみに笑ふと死ぬことがあるぜ」

「冗談いっちゃいけない。笑ふ門には福来たるさ」

「むかしギリシヤにクリシッパスといふ哲学者があったが、君は知るまい」

「知らない。それがどうしたのさ」

「その男が笑ひすぎて死んだんだ」

「へえー、そいつは不思議だね。しかしそりや昔の事だから・・・」
「昔だって今だって変りがあるものか。驢馬が銀の丼から無花果を食ふのを見て、可笑しくってたまらなくって、むやみに笑ったんだ。ところがどうしても笑ひがとまらない。とうとう笑ひ死にに死んだんだあね」
「ははは、そんなにとめどもなく笑はなくってもいいさ。少し笑ふ——適宜に——さうするといい心持だ」
鈴木君がしきりに主人の動静を研究して居ると、表の門が、がらがらとあく。来客かと思ふと、さうでない。
「ちょっとボールがはいりましたから、取らしてください」
下女は台所から、「はい」と答える。書生は裏手へ廻る。鈴木は妙な顔をして、何だいと聞く。
「裏の書生がボールを庭へ投げ込んだんだ」
「裏の書生？　裏に書生が居るのかい」
「落雲館といふ学校さ」
「ああさうか、学校か、ずいぶん騒々しいだらうね」
「騒々しいの何のつて、ろくろく勉強も出来やしない。僕が文部大臣なら、さつそく閉鎖を命じてやる」
「ハハハ、大分怒つたね。何か癪にさはる事でもあるのかい」
「あるのないのつて、朝から晩まで癪にさはりつづけだ」
「そんなに癪にさはるなら、越せばいいぢやないか」
「誰が越すもんか、失敬千万な」
「僕に怒つたつて仕方がない。なあに子供だあね。打ちやつて置けばいいさ」
「君はよからうが、僕はよくない。昨日は教師を呼びつけて談判してやつた」

「それは面白かつたね。恐れ入つたらう」
「うん」
この時また門口をあけて、「ちよつとボールがはいりましたから取らして下さい」という声がする。

二

福沢諭吉に『痩せ我慢論』というのがある。たしか勝海舟が、その身もと幕府の重臣でありながら、明治政府に出仕したのを非難したものであったと記憶している。福沢の海舟論はともかくとして、ここ落雲館の事件では、苦沙弥先生大いに痩せ我慢を張っている。上に引いたつづきは、こんな風に展開する。

「いや大分来るぢやないか、またボールだぜ、君」
「うん。表から来るやうに契約したんだ」
「なるほど、それであんなにくるんだね。さうか、分つた」
「何が分つたんだい」
「なに、ボールを取りにくる原因がさ」
「今日はこれで十六返目だ」
「君、うるさくないか。来ないやうにしたらいいぢやないか」

そうして鈴木の藤さんは、旧友の苦沙弥に、つぎのような一場の訓示を垂れる。これはかならずしも金田某の配下

として、金の力を知らない狂人に、金の力を思い知らしめようとするのではない。この世が金の世の中であるという現前の真実を説いて、安心立命を得させてやろうという、友情からの忠言と解したほうが自然である。

「仕方がないといへばそれまでだが、さう頑固にしてゐないでもよからう。人間は角があると、世の中を転がつてゆくのが骨が折れて損だよ。丸いものはごろごろと、どこへでも苦なしに行けるが、四角なものはころがるのに骨が折れるばかりぢやない。転がるたびに角がすれて、痛いものだ。どうせ自分一人の世の中ぢやなし、さう自分の思ふやうに人はならないさ。まあ何だね。どうしても金のあるものに、たてを突いちや損だね。ただ神経ばかり痛めて、からだは悪くなり、人はほめてくれず。向ふは平気なものさ。坐つて人を使ひさへすればすむんだから。多勢に無勢、どうせ叶はないのは知れてゐるさ。頑固もいいが、立て通すつもりでゐるうちに、自分の勉強にさはつたり、毎日の業務に煩を及ぼしたり、とどの詰りが骨折り損のくたびれ儲けだからね」

だが、こう鈴木君からいわれると、苦沙弥先生なるもの、いよいよ片意地をはらぬわけにいかないのである。痩せ我慢をはり通すほかないのである。すでに金の世の中を相手に、喧嘩を買って出た上は、ここであとへ引いては、自尊心の顔が立たぬ。ここはどうあっても、痩せ我慢を通すのみである。それが逆上である。それが狂気である。ただ猫だけは、冷静に主人の苦沙弥を観察している。逆上した漱石は、逆上せずに、逆上した漱石を、冷静に観察している。ここに文学者がいる。ここに文学がある。

ところが、その漱石も、上に引いたところでは、案外ありのままの自分を、叩きつけている面がある。たとえば、「そんなに癪にさはるなら越せばいいぢゃないか」という鈴木君の口吻をうけて、「誰が越すもんか、失敬千万な」と、

苦沙弥に答えさせている如きが、それである。じっさい、当時の漱石の手紙をよんでみると、彼は断じて引越さないと、あくまで頑張り通している。つまり、『猫』に描かれた落雲館事件に似た事件がじっさいにあったものか、それとも病的な被害妄想から出たものかは知らず、漱石はすなわち苦沙弥先生で、気ちがいじみた痩せ我慢を張り通していたのである。

まず明治三十九年七月十日づけの、旧友狩野享吉あての手紙がある。京都大学文科大学長に就任した狩野から、京都へ来ないかとのすすめに対して、それを断ったものだが、断る理由として、漱石はこう書いている。――「大体の上より京都はあまり志望仕らず、他に相当の候補者あらば、喜んでその人に譲り度くと存候。その理由中に、小生一身上、他人には存在し得べからざる個人的の理由も存し居候。それは外でも無之、東京の千駄木を去るのがいやな事に候。それは千駄木がすきだから去らぬと申す訳には無之、反対に、千駄木が嫌だから去らぬ事に候。このパラドックスの意味は、他に対して説明するほどの価値も無之候」

右の手紙で漱石が、「千駄木が嫌だから去らぬ」と書いているのは、『猫』の主人公が、「誰が越すもんか」といっているのに相当する。その間の消息は、つづいて次のように書かれてあるのによって分る――。「正邪曲直の衝突せる場合は、正直の方より手を引くときは、邪曲なるものをしてますます邪曲ならしめ候。これは局に当るものよりして見れば、他の月給とか、山水とか、寧静とか云ふもの以上の大事件に候。其他は申し上げず、小生が千駄木を去るは、正にこれに相当致し候。他の事は先づどうでも考ふる余地あれども、考へて此点に至ると、一も二もなく京都へ行くのがいやに相成候」

漱石は逆上せる正義派として、あくまで引越しを拒否し、東京市本郷区駒込千駄木町五七番地に頑張りつづけようとするのである。つまり痩せ我慢である。正直な方が手を引けば、邪曲な奴が勝ちほこる。それは社会を毒するか

ら、自分が身をもって防壁となり、あらゆる犠牲を払ってもふみとどまって、悲壮な英雄的抵抗をつづけよう、というのである。

おなじく八月六日の森田草平あてのものでは、「小生千駄木にあって文を草す。左右前後に居るもうろくども一切気にくはず、朝から晩まで喧嘩なり。その中にあって名文がかけぬ位なら、文章はやめてしまふ考なり。この間にあって学問が出来なければ、学問はやめてしまふなり。喧嘩をしつつ、勉強をしつつ、文章をかきつつ、もうろくどもがくたばるまでは決して千駄木を移らずして、安々と往生つかまつる覚悟」と書いている。意気軒昂たるところ、まさに志士である。志士仁人は生を求めて仁を害すことなしと論語にあるのを、地で行こうという意気込なのである。

三

この引越事件の根本義を狩野亨吉に告げたものに、さらに十月二十三日午後二時—三時、おなじく二十三日午後五時—六時発信の、二通の手紙がある。この手紙はけだし大文章である。両方ともずいぶん長いものだから、全部を引用したいのだが、それではあまり長くなるから、肝要なところだけを引き抜いて、つぎに示すならば、

「僕も京都へ行きたい。(が)自分の立脚地からいふと、感じのいい愉快の多い所へ行くよりも、感じのわるい愉快の少ない所に居つて、あくまで喧嘩をして見たい。これは決してやせ我慢ぢやない。それでなくては生甲斐のないやうな心持ちがする。何のために世の中に生れてゐるかわからない気がする。僕は世の中を一大修羅場と心得てゐる。さうして、そのうちに立つて、花々しく打死をするか、敵を降参させるか、どつちかにして見たいと思つてゐる。敵といふのは僕の主義、僕の主張、僕の趣味から見て世の為めにならんものを云ふのである。世の中は僕一人

の手でどうにもなりやうはない。ないからして僕は打死をする覚悟である。打死をしても、自分が天分を尽くして死んだといふ慰藉があれば、それで結構である。烈しい世の中に立つて、どのくらゐ人が自分の感化をうけて、どのくらゐ自分が社会的分子となつて、未来の青年の肉や血となつて生存し得るかをためしてみたい……」

ここで漱石が打死を云々しているのは、まったく湊川における正成の心事をなぞったものといえる。わたくしはむかし『楠木正成』という本を書いて、正成の心事を論じたことがある。そのとき漱石の右の文句に触れればよかったものをと、あとで残念におもったことであった。

さて以上は二十三日の第一便の方であるが、つぎは第二便からの抜萃である。第一便を書いて投函したあと、すぐ追いかけて、これを書いたのである。

「御存じの如く、僕は卒業してから田舎へ行つてしまつた。当時僕をして東京を去らしめたる理由のうちに、下の事がある。――世の中は下等である。汚ない奴が、他と云ふ事を顧慮せずして、衆を恃み勢に乗じて、失礼千万な事をしてゐる。こんな所には居りたくない。だから田舎へ行つてもつと美しく生活しよう――是が大なる目的であつた。しかるに田舎へ行つてみれば、東京同様の不愉快な事を同程度において受ける。そのとき僕はシミ〴〵感じた。僕は何が故に東京へ踏み留まらなかつたか。彼等がかくまでに残酷なものであると知つたら、こちらも命がけで死ぬまで勝負をすればよかつた……」

「しかし今の僕は、松山へ行つた時の僕ではない。僕は洋行から帰るとき船中で一人心に誓つた。どんな事があらうとも、十年前の事実はくり返すまい。今までは己れの如何に偉大なるかを試す機会がなかつた。己れを信頼した

ことが一度もなかつた。朋友の同情とか、目上の御情とか、近所近辺の好意とかを頼りにして生活しようとのみ、生活してゐた。是からはそんなものは決してあてにしない。余は余一人で行く所まで行つて、行き尽いた所で斃れるのである。余の生活は天より授けられたもので、その生活の意義を切実に味はんでは勿体ない。天授の生命をあるたけ利用して、自己の正義と思ふ所に一歩でも進まねば、天意を空ふする訳である。

「余はかやうに決心して、かやうに行ひつつある。今でも色々な所を見れば、色々な不幸やら不愉快がある。思ふに余と同様の境遇に置かれた人ならば、みなこの不幸を感じ、この不愉快を受くるであろう。而して余はこの不愉快を以て、余の過誤もしくは罪悪より生じたるものとは決して思はざるが故に、この不愉快およびこの不幸を生ずるエヂエントを以て社会の罪悪者と認めて、これらを打ち斃さんと力めつつある。ただ余の為めに打ち斃さんと力めつつあるのではない。天下の為め、天子様の為め、社会一般の為めに打ち斃さんと力めつつある。而して余の東京を去るは、この打ち斃さんとするものを増長せしめる嫌あるを以て、余は道義上、現在の状態が持続する限りは、東京を去る能はざるものである」

四

――おれは何人をも容赦しないね。おれはもう見るにしのびないからだ。朝野をあげて、目にふれるものといったら、どれもこれも憤慨の種だ。世間の奴らの生きているざまを見ていると、暗い気持になって、ふかい苦悩にとざされるのだ。どこもかしこも、ただもう汚らわしい阿諛と、不正と、打算と、背信と、奸策だらけじゃないか。おれはこの上もう我慢ができない。気も狂うばかりだ。おれは断然あらゆる人間に、まっこうから挑みかかってやるつもりだ――

モリエールの有名な喜劇『人間ぎらい』の主人公アルセストが、こういって叫ぶ。このアルセストのせりふは、漱石の手紙の文句と大いに似ている。引越事件での漱石も、不正不義の世間を相手に、「真向から挑みかかってやる」つもりなのだ。「余はこの不愉快を以て、余の過誤もしくは罪悪より生じたるものとは決して思はざるが故に、この不愉快およびこの不幸を生ずるエヂエントをもって、社会の罪悪者と認めて、これを打ち斃さんと力めつゝある」のだと、漱石は宣言している。

こういった調子で、単純きわまる正義派の『坊っちゃん』は、突進していった。そのあとに今度は『野分』の白井道也が、悲壮な弾劾者として現われる。

世間では正義派を二つの型に分類して済ましている。一つがハムレット型で、一つがドン・キホーテ型である。ハムレットは懐疑派、ドン・キホーテは狂信派ということで、割切っている。しかし考えてみると、なにも強いてこの二つの型にはめこんでしまう必要はあるまい。アルセスト型もあっていいし、苦沙弥型もあっていい。さらにいえば、ドン・キホーテが勇気があって、ハムレットが意気地なしだときめつけるのも、無理なはなしである。あたかもアルセストが利口で、苦沙弥先生が馬鹿だといえないのと、同断である。ただ通じていえることは、正義派はみんな気が狂っているということである。ひどいのは精神病患者に類しているし、軽いのでも神経症患者たるをまぬかれない。してみると、正気では正義派はつとまらぬものとみえる。

漱石はこれを、神経衰弱という言葉でいっている。いまの流行語でいうとノイローゼである。しかも漱石は、自分が神経衰弱にかかっていることを確認し、且つそのことを誇りとしている。このような正義派は珍らしいようだが、いま批判的な文芸を創作しようとするには、これはもと必須の条件とせねばなるまい。それにしても、狂気になったり正気に立ち返ったり、ハムレットになったりドン・キホーテになったり、傍から観ている目には、まったくなんと

も多忙を極めている。

「君は九月上京のことと思ふ。神経衰弱は全快のことなるべく結構に候。しかし現下のごとき愚なる間違つたる世の中には、正しき人でありさへすれば、かならず神経衰弱になることと存じ候。これから人に逢ふたびに、君は神経衰弱かときいて、然りと答へたら、普通の道義心ある人間ときめることにいたさうと思つてゐる。いまの世に神経衰弱にかからぬ奴は、金持の魯鈍ものか、無教育の無良心の徒か、さらずば二十世紀の軽薄に満足するひようろく玉に候。もし死ぬならば、神経衰弱で死んだら名誉だらうと思ふ。時があつたら、神経衰弱論を草して、天下の犬どもに犬であることを自覚させてやりたいと思ふ」

これは遡って六月七日づけで、当時広島の郷里に帰っていた門下の鈴木三重吉に与えたものである。もしアルセストが明治の日本に生きていたら、きっと同じようなせりふを吐いただろうと、わたしは思っている。シェクスピアやセルヴァンテスの徒は、一筋縄でいかないたいへんな曲者であったから、ハムレットやドン・キホーテをつくり出したので、アルセストが単純なのは、モリエールが正直者だったからであろう。この点においては、わが漱石も正直者であった。

漱石の正義派のいいところは、『坊っちゃん』にしても、『野分』にしても、『虞美人草』にしても、しごく颯爽としているところである。ハムレットは女々しい。ドン・キホーテはかわいそうな気がして同情の念が湧く。しかるに強度の神経衰弱患者である漱石は、大いにわれらを勇気づけてくれる。のちに『道草』などで、自分の暗い宿業みたいなものを丹念につづった漱石と、これが同じ人間かとうたがいたくなるほど、さわやかで活気に溢れている。もっ

ともこれには、イプセンを読んで鼓舞されたという事情もあったろう。イプセンの初期の作品は、概してモリエールの近代版といえる。しかあれども漱石は、やはり漱石である。彼はまだ西洋近代の毒に侵されていないから、勘も確かで、底も深いのである。

五

このような自分流主義を、漱石はあくまで貫いていった。これが彼の独立自尊で、『虞美人草』のあとからぐいと作風が変っていったのも、是非がない。自己に忠実で、あくまで自己流を貫いたからのことだ。おなじ年の七月三日づけ、高浜虚子あての手紙でも、そのことを書いている。――「小生は生涯に文章がいくらかけるか、それが楽しみに候。人間は自分の力も自分でためしてみないうちは、わからぬものに候。握力などは一分でためすことができ候へども、自分の忍耐力や、文学上の力や、強情の度合やなんかは、やれるだけやつてみないと、自分で自分に見当のつかぬものに候。古来の人間は、たいがい自己を充分に発揮する機会がなくて死んだらうと思はれ候。惜しいことに候。機会は何でも避けないで、そのままに自分の力量を試験するのが、いちばんかと存じ候」

たいへんな元気である。ずいぶん大きく出たものだと思うが、そのくせちっともいや味にきこえない。どこか滑稽なところがあって、大いによろしい。ちなみにこの手紙は、すでに『坊っちゃん』を発表しおわって、つぎの『草枕』にとりかかる前のものである。『猫』はまだつづいていた。

手紙はつぎのようにつづいて、意気いよいよあがっている。「小生は何をしても、自分は自分流にするのが自分に対する義務であり、且つ天と親とに対する義務だと思ひます。天と親がコンナ人間を生みつけた以上は、コンナ人間で生きて居れといふ意味より外に解釈しやうがなく。コンナ人間以上にも以下にもどうすることも出来ないのを、強

いてどうかしようと思ふのは、当然天の責任を自分が背負って苦労するやうなものだと思ひます。この論法からいふと、親と喧嘩をしても充分自己の義務を尽して居るのであります。いはんや隣り近所や、東京市民や、日本人民や、乃至世界全体の人の意思に背いても、自分には立派に義理が立つわけであります。これではちと気焔が高すぎましたね・・・」

ここで「隣り近所」がまつ先に出てくるのは、例の引越事件――『猫』でいうなら落雲館中学事件が、頭にひつかかっていたからのことと思われる。「ボールがはいつたから取らしてください」が、きこえていたのかも知れない。その声を耳にしながら、こんな気焔をあげてしまったのかも知れない。

「昔はコンナ事を考へた時期があります。正しい人が汚名をきて罪に処せられるほど悲惨なことはあるまいと。いまの考へは全く別であります。どうかそんな人になって見たい。世界総体を相手にして、ハリツケにでもなって、ハリツケの台から下を見て、この馬鹿野郎と心のうちで軽蔑して、死んで見たい。もっとも僕は臆病だから、本当のハリツケは少々恐れ入る。流罪くらゐなところでいいなら、進んで願ひたい。」とうとうハリツケまで、のぼりつめていった。これはもうモリエールではなくて、イプセンである。すなわちこれは一種のキリスト論である。ただ自分を神の子だとも、人間の原罪を贖うのだとも、考えていないから、やすやすと自分を十字架にかけて、十字架の上から世間を見おろして、喜んでいるのである。だからもちろん、キリストと張り合おうなどという気持は、さらさらない。そこが気持がよいのである。死ぬまで、でない狂うまで、キリストと張り合っていたニーチェなどは、西洋の生贄といはうか、気の毒なものだ。

六

このような自分流主義を、漱石はのちに自己本位とも、『私の個人主義』とも名づけた。大正三年十一月二十五日に、学習院の輔仁会に招かれてこころみた一場の講演は、この題目でなされている。この講演には漱石の根本態度といったものが、たいそうよく語られていると思う。もしさらに『文学論』の序文をも併せ読むならば、いっそういきいきとした印象が得られるであろう。

この講演のなかで、漱石は自分の学問のことを、こんな風に告白している。――「私は大学で、英文学といふ専門をやりました。その英文学というものは、どんなものか、とおたづねになるかも知れませんが、それを三年専攻した私にも、何が何だかまあ夢中だったのです。ウォーズウオースは何年に生れて何年に死んだかとか、シエクスピヤのフオリオは幾通りあるかとか、スコットの書いた作品を年代順に並べてみろとか・・・英文学はしばらくおいて、だいいち文学とはどういふものだか、これでは到底わかるはずがありません。それなら自力でそれをきはめ得るかといふと、どこをどううろついても、手掛りがないのです。とにかく三年勉強して、つひに文学はわからずじまひだったのです。私の煩問は、だいいちここに根ざしてゐたと甲しあげても、さしつかへないでせう。」

そして漱石は訴えるのである。若い学習院の生徒たちに訴えるのである。――自分はこのようなあやふやな態度で、世の中へ出ていったのだと。そして、教師になったというよりか、教師にさせられてしまったのだと。そして、あやしい語学で、どうにかお茶をにごしていったのだと。そして彼はさらに、つぎのように、訴えをつづけてゆくのである。

「どうかこうかお茶をにごして行かれるから、その日その日はまあ無事に済んでゐましたが、腹の中はつねに空虚でした。空虚ならいっそ思ひきりがよかったかも知れませんが、何だか不愉快な、煮えきらない、漠然たるも

のが、いたるところに潜んでゐるやうで、たまらないのです。しかも一方では、自分の職業としてゐる教師といふものに、すこしの興味も有ち得ないのです。教育者であるといふ素因の私に欠乏してゐることは、はじめから知ってゐましたが、ただ教場で英語を教へることが、すでに面倒なのだから、仕方がありません。私は始終中腰で、すきがあったら自分の本領へ飛び移らう飛び移らうとのみ、思ってゐたのですが、さてその本領といふのが、あるやうで、ないやうで、どこを向いても、思ひ切ってサッと飛び移れないのです」

わたしがこの『私の個人主義』を全集ではじめて読んだのは、ずいぶん昔のことになるが、それ以来、上に引いた一節の如きは、妙に頭にふかぶかと刻み込まれて残ってしまった。空虚——不愉快——煮えきらない——たまらない——中腰——本領——飛び移る——思ひ切って——というような漱石の言葉の一つ一つが、いかにも適切で的確であることの故か、それらがしっかり記憶にきざまれて、いまに至って、忘れようとしても忘れられないものになっている。そういえばこの講演を、わたしは今日にいたるまでに、何べん読み返したことであろうか。そして読み返してみるたびに、あらたな勇気を奮い起こさしめられるのである。

「私の個人主義』に戻って、漱石はこのような不安を抱いたまま、大学を卒業した。松山中学に赴任した。熊本の五高に移った。さらにおなじ不安を抱いて、英国留学の途にのぼった。留学した上は、責任上無為にすごすわけにはいかない。彼は何かしようと努力した。しかし依然としてふくろの中に閉じこめられている思いで、茫としてつかみどころがない。このふくろを突き破る錐を求めるが、ロンドンじゅう探し歩いても、見つかりそうにもなかった。「私は下宿の一間で考へました。つまらないと思ひました。いくら書物を読んでも、腹の足しにならないのだと、あきらめました。同時に、何のために書物を読むのか、自分でもその意味がわからなくなってきました。このとき、私は、

はじめて、文学とはどんなものであるか、その概念を根本的に自力で作りあげるより外に、私を救ふ道はないのだと悟ったのです。いままでは全く他人本位で、だめであったといふことに、やうやく気がついたのです！」

漱石は、自己本位の四字を手に入れる。そして、いままでの他人本位ときっぱり手を切る。そして、この自己本位の四字から、あらたに出立する。『私の個人主義』は、自己本位を手に入れるまでのいきさつを正直に告白しているところに、受用不尽なものがあるのだ。「私はこの自己本位といふ言葉を自分の手に握ってから大変強くなりました。」「そのとき私の不安は全く消えました。私は愉快な心をもって陰鬱な倫敦を眺めたのです。」

そこでわたしらは、『猫』の主人公の狂気も、痩我慢も、神経衰弱も、逆上も、喧嘩も、弾効も、要するに苦沙弥先生の正義派としての勇気は、まったくこの自己本位から出発したものの強さであることを知り得たのである。この状態を正気という。

（この小論は、数年前雑誌『国民評論』に連載したものの一部を、今回補訂したものである。なお『人間きらい』の訳文は、先師辰野隆先生の『孤客』に拠った。）